第 236 回　東大医学部の小金井像、緒方像、三浦像、大澤像、山極像、三田像、長与像、および井上像　　**筆者：林　久治（記載：2023 年 5 月 17 日）**

（1）前書き

私（筆者の林）は Random Walks （乱歩）という題名で偏屈老人（林久治）の気侭な紀行文のサイトを始めている。私の紀行文では、通常の紀行文にはない、斜め目線からのご紹介を書くことに拘りたいと思います。通常の紀行文に関しては、既に優れたサイトが沢山ありますので、それらをも引用しつつ、ユニークなご紹介を記載することに心掛ける所存です。

一方、私は日本の銅像探偵団（1）のサイト/）の銅像探索に参加している。私は珍しい銅像を探して、探偵団の団長さんに「ギャフン！」と仰っていただけることを目標としている。ここで「珍しい」とは、「①見つけ難い場所に隠れている有名人の銅像。②市井で頑張って人生を過ごしたが、有名人ではない人物の銅像」と言う意味である。私は自宅が東京にあり、孫達が大阪にいるので、主として東京近郊と近畿地方で銅像探索を行っている。最近、私はネット記事を丹念に調査し、そのような「スクープ銅像」の候補を多数見つけている。

武漢肺炎による自粛生活で家に籠っていると、運動不足で体重が増加するし、精神的にも圧迫を感じる。私の銅像探索は不要不急の活動ではなく、私の生存に必要不可欠である。昨年の 7 月は、第 7 波と猛暑のため、私は銅像探索をしばらく自粛していた。しかし、大阪在住の 3 人の孫達は夏休み前に感染したが軽症であった。そこで、私は 9 月初旬に大阪に行き、近畿の銅像を探索した。東京に帰ってからも、運動を兼ねて銅像探索を続けている。私の銅像探索記の全ては、2）のサイト/f から閲覧出来ます。

私は 3 月 21 日から 31 日まで、大阪に滞在し孫達の世話をした。その間に、銅像探索も少しは出来た。227 回の記事/f では、その中から大阪市の弘世像の探索記を記載した。228 回の記事/f では、茨木市の奥田光像の探索記を記載した。229 回の記事/f では、京都市の田辺朔郎像の探索記を記載した。230 回の記事/f では、大阪市中央区の林市蔵像の探索記を記載した。

私は 4 月 22 日と 5 月 5 日に、都内で覚鑁上人像を探索し、それらの探索記を前回の記事（その 1 /f とその 2 /f）に記載した。私は 3）のサイト/1 で、東大医学部 2 号館 3 階大講堂前のホールに多数の銅像が設置されていることを知っていた。

図 1．

東大医学部 2 号館 3 階大講堂前のホールに設置された銅像、

本図は、3）のサイト/1 より借用。

本ホールの銅像陳列の写真を図１に示す。普段は、この場所は部外者の立ち入りは禁止である。しかし、5 月 13 日には大学祭（五月祭）があり、私は「五月祭の期間は本ホールに入れるかも知れない」と思い、当日に探索に行った次第である。幸い、当日は大講堂でコンサートがあり、前のホールは喫茶店になっていたので、医学部 2 号館 3 階に立ち入ることが出来た。本稿はその探索記である。なお、本稿では私の意見などを青文字で、資料の内容などを緑文字で記載する。

（２）東京大学本郷キャンパスの銅像

東京大学本郷キャンパスには多数の銅像が設置されている。その数は、日本の大学ではおそらく断トツであろう。銅像の他にも、肖像画やレリーフも沢山存在している。「博士の肖像」と題する本（４）のサイト、以後は本書と書く）がある。その内容は、５）のサイト/1 に収録されている。そこに、次の記載がある。

東京大学構内の随所で目にする肖像画や肖像彫刻の所在調査が、これまでに行われてこなかったわけではない。一九六三年には、中沢賢五郎編『東大のあゆみ–浮彫りにした百年』（立花書房）という小冊子が出版されているし、一九八八年には全学を対象とした調査が行われ、未刊ながらもその成果はリストになっている。ところが、前者に十五点の肖像彫刻、後者には八十一点の肖像彫刻が記載されているものの、どちらも個々のデータが不十分で、完全なリストとはいいがたい。そもそも肖像画が調査の対象から外れている。いったいどれほどの数の歴代教授たちの肖像が学内にあるのだろうか。この難問を前にして、今回は総合研究博物館での展覧会開催を機に、肖像画をも含めたいわば完全なる台帳づくりを目論んだのである。

本書に収録されている多数の銅像は、大学の校舎の内外に設置されている。東京大学の通路は「原則一般開放」なので、校舎外に設置されている銅像は、自由に撮影して出版することが出来る。従って、１）のサイト/にも東大の校舎外の銅像が多数収録されている。

一方、東大の校舎内部は「関係者以外は立入禁止」との表示が全ての校舎の出入口に貼られている。そこで、校舎内に立ち入って銅像を探索するには、どうすればよいであろうか？私は次の３つの方法を採用している。

①東京大学総合図書館の閲覧券：私は卒業生なので、閲覧券を手に入れることが出来た。ただし、総合図書館の内部は写真撮影禁止である。しかし、本券を持って学部の図書館に行くと、図書館の内部や途中の通路に銅像があると、それを撮影する可能性が生じる。私はこの手法を用いて、医学部図書館内の銅像を撮影することに成功した（114 回の記事/f）。

②多数の学生達が出入する校舎の出入口は、私が少し侵入しても咎められることはまず無い。そこで、校舎に深入りせずに、出入口付近で銅像を発見すれば撮影することが出来る。私はこの手法を用いて、農学部内の銅像を撮影することに成功した（111 回の記事/f）。

③学園祭やオープンキャンパスの日に大学に行くと、普段は立ち入りが出来ない場所や建物に入ることが出来る。ただし、武漢肺炎の猖獗のため、ここ数年間はこの手法が使えなくなっていた。事実、私は 2019 年 11 月 9–10 日に開催された玉川大学の大学祭で銅像探索を行ったが（109 回の記事/f）、それ以降は大学祭に行っていない。本年の東大本郷の大学祭（五月祭）は、5 月 13–14 日に従来の形式で開催されるとのニュースを聞いたので、医学部 2 号館 3 階の探索を試みた次第である。

（３）東大医学部２号館３階大講堂前のホール

以上のような経緯で、私は５月 13 日の東大五月祭の当日、東大医学部２号館に行った。地下鉄本郷三丁目駅から当所までの地図を図２に示す。当日は、小雨模様ではあったが、東大構内は見物人（特に、若者達）で一杯であった。

図２．地下鉄本郷三丁目駅から東大医学部２号館までの地図

次ページの図３上に東大医学部２号館を示す。「東大医学部」と書かれた横断幕は普段はなく、五月祭の際だけに使われる。図３下には、本館３階にある大講堂の内部を示す。普段はここには医学部関係者しか入場できないが、五月祭には医学部生による演奏会が開催されるので、見物客に開放されていた。

（本文は、５ページに続く）

図３．上：東大医学部２号館、下：本館３階の大講堂の内部。

図 4. 五月祭での医学部２号館３階ホールの様子

東京大学医学部２号館の紹介は、６）のサイト/1 に記載されている。その概要は次の通りである。

本館は内田祥三の設計で、1937 年に竣工。現在は医学部２号館となっているが、もとは医学部本館として建てられた。連続する半円アーチが特徴の、東大本郷キャンパスの中でもとりわけ美しい建物のひとつ。この建物の先代に当たる建物は、東大医学部の前身・東京医学校本館として 1876 年に建てられた木造二階建の擬洋風建築であるが、現在も東京大学総合研究博物館小石川分館として現存する。

図４に五月祭での医学部２号館３階ホールの様子を示す。図１と同様に、壁には歴代教授の肖像画が掲げられ、あちらこちらに胸像が設置されていた。当日は、このホールは学生が運営する喫茶店となっていた。私は、学生の一人に写真撮影の許可を貰って、本ホールに設置されていた全ての胸像を撮影することが出来た。

本稿では、私が最も探索したかった小金井良精像を先ず紹介し、次に緒方洪庵先生の子孫である緒方知三郎先生と緒方富雄先生の胸像を紹介する。最後に、他の胸像も紹介する。

（４）小金井良精先生像

３階ホールの中央には、髑髏を持った先生の胸像があった。その写真を次ページの図５に示す。本像の正面には「小金井良精先生壽像」との文字があった。本像は髑髏を持った極めて珍しい銅像で、私が東大で最もお会いしたかった銅像の一つであった。図らずも、ここでお会いすることが出来、大変感激した。

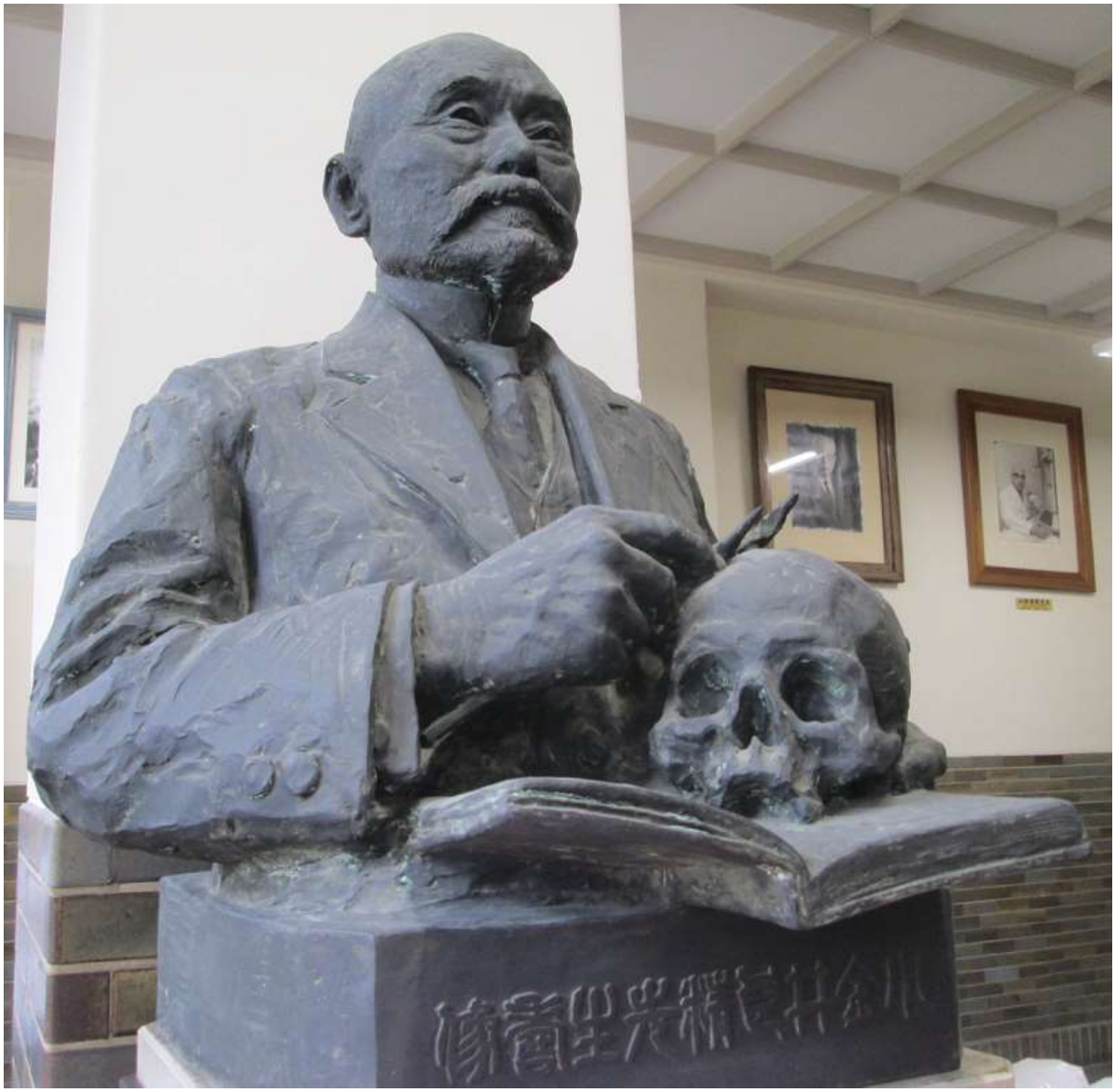

図５．小金井良精先生壽像

本像の情報（先生の略歴、制作者の略歴、制作年など）は、５）のサイト/1に記載されている。私の最大の疑問は、「なぜ髑髏を持った胸像が造られたか？」ということである。その経緯は、苫小牧駒澤大学の植木哲也先生の「ジキル博士とハイド氏」と題する記事（7）のサイト/1）に次のように書かれている。

①ショートショートで有名な作家星新一に、「祖父・小金井良精の記」という長編の作品があります。星新一の母方の祖父である小金井良精の伝記です。小金井良精は幕末に生まれ、東京大学医学部を主席で卒業し、ドイツ留学後日本人としてはじめて解剖学を講じました。アイヌ民族の形質に関する研究は世界的に有名で、「アイヌといえば小金井、小金井といえばアイヌ」と言われたそうです。学生や同僚からも誠実な学者として慕われ、母校には銅像が建てられ、没後には生誕 100 年の記念式典が執り行なわれました。

②その小金井は、研究に必要な人骨を手に入れるため、1888 年と 1889 年の夏、北海道を旅行しました。各地でアイヌの墓を掘り、無断で数多くの遺骨を持ち出したのです。日本の解剖学の父といわれた大学者は、アイヌ民族から見れば祖先の墓を荒らす犯罪者でした。

彼が持ち出した 160 以上の遺骨は土に戻されることなく、いまも大学のどこかに放置されています。

③小金井がジキルとハイドのような二面的性格の持ち主だったわけではありません。むしろ彼は実直な研究者でした。だからこそ熱心に墓を掘ったのです。二面性があるとすれば、それは背後にあった学術研究や教育制度でしょう。それらは近代国家に「発展（development）」をもたらしたいっぽうで、世界各地の先住民族の生活と生存を窮地に陥れてきました。しかし、この事態に人びとが気づくようになったのは、ごく最近のことです。すぐれた研究者・教育者であっても、自分たち世界の外側で起こっていることの意味をきちんと受け止めてこなかったのです。

最近は、上記の状況が広く認識され、東大でアイヌ民族の慰霊祭が執り行われた。その模様を、８）のサイトは次のように報道している。

多くが“盗掘”により持ち出された先祖の遺骨：東大でアイヌ民族の慰霊祭

東京大学が保有する 198 体に及ぶアイヌの遺骨を慰霊するため、（2014 年）10 月 22 日、同大学医学部二号館前でイチャルパ（慰霊祭）が執り行なわれた。旭川アイヌ協議会会長の川村・シンリツ・エオリパック・アイヌ（「先祖を大事にする人」の意味）さんが祭祀を司り、アイヌ伝統舞踊をレラの会代表の平田幸さんが舞った。雨のなか儀式の厳粛さに学生も足を止め、キャンパスにはアイヌ語の歌が響いた。文部科学省の調査でアイヌの遺骨が全国 12 大学に 1600 体以上存在することが昨年公表され、多くが明治期以降、盗掘によって蒐集されたことが判明している。東大が保管するのは、主に 1888-89 年に小金井良精医学部教授がクリル諸島や北海道で集めたもの。彼の銅像が標本室入口に飾られていることに、川村さんは憤る。アイヌ民族と支援者は慰霊祭後、遺骨返還を求める 573 筆の署名を持って東大本部に向かった。しかし、大学側はビルのシャッターを閉じ、警備員と職員がバリケードを張り、署名は届けられなかった。

以上の資料などにより、小金井像の概要は次の通りである。

小金井良精先生壽像

設置場所：東京都文京区本郷 7-3-1　東大医学部 2 号館 3 階ホール

制作者：堀進二

制作時期：1937 年 7 月

座主略歴：小金井良精（こがねい・よしきよ、1858-1944）は解剖学教室の二代教授。新潟県長岡に生まれ、1880 年、東京大学を卒業するとすぐにドイツに留学、解剖学および組織学を学んだ。85 年の帰国後は、骨格を中心に日本人の人類学的研究を進めた。86 年、東京帝国大学医科大学の発足とともに教授となった。田口和美教授没後、第一講座を担任し、1921 年に退官した。

制作者略歴：堀進二（1890-1978）は太平洋画会、文展、帝展、日展で活躍した彫刻家。東京に生まれ、太平洋画会研究所に入り、新海竹太郎に師事した。このころ、中原悌二郎や中村葬ら新宿中村屋の芸術家グループと交わる。のちに中村舞の肖像彫刻を制作した。1911 年以後、文展、帝展に出品を続けた。東大工学部建築学科で、非常勤講師として、新海竹太郎のあとを受け、28 年から 47 年まで、さらに 56 年から 59 年まで彫塑の講義を受け持った。東大の肖像彫刻を数多く制作している。

（５）緒方洪庵先生の子孫の銅像

３階ホールには、10 其の胸像が展示されていた。その内、三田定則先生像が２基あったが、緒方姓の胸像も 2 基あった。（本文は、9 ページに続く）

図６．
上：緒方知三郎先生像、
下：緒方富雄教授像。

図６上に緒方知三郎先生像を、図６下に緒方富雄教授像を示す。緒方洪庵先生（1810-1863）は大変有名で、大阪に適塾（大阪大学の前身）を開き、人材を育てた。天然痘治療に大きく貢献し、「日本の近代医学の祖」といわれる。洪庵先生の子孫の方々も大変優秀で、医学をはじめとして各方面で活躍されている。知三郎先生は洪庵先生の孫であり、富雄先生は曽孫である。ウィキペディ（緒方洪庵、緒方惟準、緒方安雄、緒方富雄）や９）のサイト/を参考にして、洪庵先生の子孫の方々を調べると、次の結果が得られた。

① 緒方洪庵の子供達

次男・惟準（これよし、1843-1909）：明治天皇の侍医、1869 年に浪華仮病院（大阪大学医学部の前身）の院長。1871 年から陸軍の軍医。1887 年に大阪にて緒方病院を開設。

三男・惟孝（これたか、1844－1905）：1865 年のロシア留学生となる。帰国後大蔵省に入り、後に新潟県判事, 帝国大学病院薬局取締となった。退官後は緒方病院の薬局長。

五男・惟直（1853-1878）：1873 年のウィーン万国博覧会で通訳。

六男・收次郎（1857-1942）：1889 年から 3 年間滞欧し、帰国後に緒方病院の 2 代目院長。

四女・八千代の婿・拙斎（1834－1911）：適々斎塾を継ぎ、惟準らと 1887 年に緒方病院を設立、1889 年には大阪慈恵病院を設立。

② 緒方洪庵の孫達

惟準の二男・銈次郎（1871-1945）：1925 年に緒方病院の 3 代目院長に就任。

惟準の三男・知三郎（1883-1973）：1923 年に東京大学医学部教授、1957 年文化勲章受章。

惟準の四男・章（1887-1978）：1912 年に東大医科大学薬学科を卒業、薬学博士、1930 年に教授。日本の内分泌科学の創始者

八千代の長女の夫・正清（1864－1919）：1892 年に緒方病院の産婦人科長となり、その後日本初の本格的な産婦人科の専門病院・緒方婦人科病院を設立し独立。

③ 緒方洪庵の曾孫達

銈次郎の長男・準一（1895-1988）：1926 年に緒方病院の 4 代目院長に就任するも、1929 年に財政悪化により閉院。1960 年に奈良県立医科大学学長。

銈次郎の二男・安雄（1898－1989）：小児科医、1937 年に東宮侍医、後に山王病院院長。

銈次郎の三男・富雄（1901-1989）：血清学者、医学史学者、1949 年東京大学医学部教授。

知三郎像の情報（先生の略歴、制作者の略歴、制作年など）は、５）のサイト/1 に記載されている。しかし、富雄像の情報は記載されていない。この意味では、富雄像は銅像学会では新規である。本像は、「福井市美術館収蔵の高田博厚全彫刻作品 175 点」のリスト（10）のサイト/1）に収録されている。本リストより、本像は 1963 年の制作と判明した。以上の資料などにより、両像の概要は次の通りである。

緒方知三郎先生胸像

設置場所：東京都文京区本郷 7-3-1　東大医学部 2 号館 3 階ホール

制作者：不明、制作時期：不明

座主略歴：緒方知三郎（1883-1973）は病理学教室教授。緒方洪庵の孫として東京都に生まれた。1907 年に医科大学を卒業へ病理学教室に入り、山極勝三郎に就いて学んだ。1910 年から 13 年まで、ドイツに留学した。帰国後、直ちに助教授となり、23 年に山極勝三郎が退官したあとを受けて、第一講座担任の教授となった。43 年に退官した。

緒方富雄教授胸像

設置場所：東京都文京区本郷 7-3-1　東大医学部 2 号館 3 階ホール

制作者：高田博厚

制作時期：1963 年

座主略歴：緒方富雄（1901 年 11 月 3 日 － 1989 年 3 月 31 日）は、緒方洪庵の本家 3 代目・緒方銈次郎の三男として大阪府に生まれる。日本の血清学者、医学史学者。血清研究以外にも、病理学、蘭学、出版、社会事業など様々な分野で活躍し、その業績は数多い。1949 年東京大学医学部教授、東京大学医学図書館館長を務めた。1962 年に定年退官し、東京大学名誉教授となる

制作者略歴：高田 博厚（たかた ひろあつ、1900 年 8 月 19 日 － 1987 年 6 月 17 日）は、第二次世界大戦前から戦後までをフランスで新聞記者として過ごした彫刻家。思想家、文筆家、翻訳家としても活躍した。

（6）三浦守治像、大澤岳太郎像、山極勝三郎像、三田定則像、長与又郎像、および井上通夫像

東大医学部 2 号館 3 階ホールに設置されていた残り 6 基の胸像の写真と概要を、先生方の出生順に、以下に紹介する。なお、すべての胸像の情報（先生の略歴、制作者の略歴、制作年など）は、5）のサイト/1 に記載されている。

図 7．三浦守治先生像

制作者：武石弘三郎

制作時期：1917 年

座主略歴：三浦守治（1857-1916）は病理学教室教授。磐城国御木沢村に生まれ、1881 年に医学部を卒業した。翌 82 年、ドイツに留学し、ライプチヒ大学およびベルリン大学で病理学を研究した。87 年に帰国し、教授となり、病理学と病理解剖学を担任した。1911 年に退官した。

制作者略歴：武石弘三郎（1877-1963）は文展で活躍した彫刻家。新潟県出身。東京美術学校彫刻科で、長沼守敬に師事した。卒業後、1901 年から 1909 年までベルギーに留学、ブリュッセル王立美術学校に学んだ。帰国後、早稲田大学理工科彫刻科講師となり彫塑を教える一方、11 年からは文展に出品し、肖像彫刻家として一家を成した。東大でも、医学部教授の肖像彫刻に、武石の手になるものが多い。

図８．大澤岳太郎先生像

制作者：吉田□三澤郎

制作時期：1922 年秋

座主略歴：大澤岳太郎（1863-1920）は解剖学教室教授。尾張国津島に生まれ、1887 年に医科大学を卒業した。94 年から 98 年までドイツに留学し、比較解剖学を学んだ。1900 年に教授となり、第三講座を担任した。その後、1904 年に田口和美が亡くなったため、第二講座を担任していた小金井良精が第一講座に、大沢が第二講座に移った。在職のまま没した。

制作者略歴：不明

図９．山極勝三郎先生像

制作者：矩一（児島矩一の可能性あり）

制作時期：1929 年秋

座主略歴：山極勝三郎（1863-1930）は病理学教室の二代教授。信州上田に生まれ、1888 年に医科大学を卒業した。病理学は 83 年に独立した課目となり、ベルツが受け持った。次いでディッセ、三浦守治が担任した。1893 年に二講座制が設定されると、三浦が第一講座を担任、翌 94 年に山極が助教授として第二講座を担任した。95 年に教授となり、1910 年から第一講座を担任した。23 年に退官。

制作者略歴：児島矩一　（こじま・くいち、1896－1934）は大正-昭和時代前期の彫刻家。明治 29 年 3 月 3 日生まれ。児島虎次郎の甥。朝倉文夫に学び、大正 11 年帝展に初入選。魂人（かいじん）社の結成に参加した。昭和 9 年 10 月 6 日死去。39 歳。岡山県出身。東京美術学校（現・東京芸大）卒。号は巨眼。

図 10．三田定則先生像

制作者：不明

制作時期：不明

座主略歴：三田定則（1876-1950）は血清学および法医学教室教授。岩手県盛岡出身、1901 年に医科大学を卒業し、1904 年に法医学教室助教授となった。その後、1909 年から四年間、ドイツ、フランスに留学し血清学を学んだ。12 年に帰国し、18 年に開設された血清学教室教授となり、21 年からは退官した片山国嘉のあとを継いで法医学教室教授を兼担した。36 年に退官した。

図 11．長与又郎先生像

制作者：宏三（経歴不明）

制作時期：1937 年

座主略歴：長与又郎（ながよ またお、1876-1941）は病理学教室教授。医学者長与専斎の三男として東京都に生まれた。作家長与善郎は末弟、1904 年に医科大学を卒業、ドイツに留学した。1907 年に病理学教室講師となり、10 年、第一講座に移った山極勝三郎のあとを受け、助教授として第二講座を担任した。翌 11 年に教授となり、34 年まで務めた。35 年に総長に就任した。38 年に文部大臣荒木貞夫から総長官選案を示されるも、大学の自治を守るために戦い、荒木の案を撤回させて総長を辞任する。

図 12. 井上通夫先生像

制作者：不明

制作時期：不明

座主略歴：井土通夫（1879-1950）は解剖学教室教授。徳島出身、1904 年に医大学を卒業し、1906 年から 11 年までドイツとフランスに留学した。21 年から 39 年まで、解剖学教室教授として第二講座を担任した。発生学の研究に務めた。

私（筆者の林）は徳島市出身であるが、同県人の大先輩である井上通夫先生のお名前は今回の銅像探索で初めて知った次第である。通夫先生の経歴は、5）のサイト/1 に少し記載されているに過ぎない。そこで、私は通夫先生のネット検索をすると、「歴史が眠る多磨霊園」の記事に通夫先生の欄（11）のサイト/1）があることを発見した。それには、次のように記載されていた。

井上通夫（1879.2.28－1959.6.4）：大正・昭和期の解剖学者

笠井与三平の三男として徳島県西尾村に生れ、後に井上達世の養子となる。1903 年 12 月東京帝国大学医科大学を首席で卒業。 ’06 年よりドイツ、フランスに留学、帰国後東大講師をへて、’14 年『中間骨其発生及兎唇其他ノ研究』により医学博士の学位を受け、同大学助教授、教授（大澤岳太郎教授の後任）を歴任。’39 年 3 月定年退官、その後日本歯科大学教授。 口蓋の発生、兎唇、狼咽、顔面の形成についての研究では、世界的に知られている。特に’30 年カザン大学(ソ連邦)創立 125 年祭に招かれて行った講演『口蓋の発生機構』は有名である。 研究論文には「口蓋ノ発生ニ就テ」(東京医会誌、日本医会誌、十全会誌)がある。

また、「井上通夫先生の解剖学講義録（内臓学）」と題する記事（12）のサイト/m）もある。

参考資料

１）のサイト：https://douzou.guidebook.jp/

２）のサイト：http://masaniwa.web.fc2.com/Ranpo.pdf
３）のサイト：http://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DPastExh/Museum/ouroboros/03_02/shouzou.html
４）のサイト：単行本「博士の肖像」：東京大学出版会、1998 年 11 月 5 日発行。
５）のサイト：http://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DPastExh/Publish_db/1998Portrait/index.html
６）のサイト：http://kenchiku228.blog85.fc2.com/blog-entry-660.html
７）のサイト：http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/tsubasa/essei/25-12.html
８）のサイト：多くが“盗掘”により持ち出された先祖の遺骨――東大でアイヌ民族の慰霊祭 ｜ 週刊金曜日オンライン (kinyobi.co.jp)
９）のサイト：https://keibatsugaku.com/ogata-2/
10）のサイト：http://www.art.museum.city.fukui.fukui.jp/gallery.html
11）のサイト：http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/PERSON/A/inoue_michi.html
12）のサイト： http://www.ndu.ac.jp/~library/fujimi/sensei24.htm